「かいまみ」の背景―仙女譚から『伊勢物語』へ―

山本登朗

一

『万葉集』の巻十六前半の多くの歌は、詠作事情を述べる長い漢文の題詞を伴っていて、平安時代の歌物語へと続く、その原形のひとつとも考えられている。たとえば、二首一組からなる次の作（三八〇四・三八〇五）は、その典型的な一例と言ってよい。

昔壮士あり、新しく婚礼を成す。未だ幾時も経ねば、忽ちに駅使となりて、遠き境に遣はされぬ。公事は限りあり、会ふ期は日なし。ここに娘子、感慟悽愴、疾疢に沈み臥しぬ。累年の後に、壮士還り来り、覆命すること既に了りぬ。乃ち詣り相視るに、娘子が姿容の、疲羸せること甚異だしくして、言語哽咽す。ここに壮士、哀嘆びて涙を流し、歌を裁りて口号ぶ。その歌一首。

かくのみにありけるものを猪名川の奥を深めて我が思へりける

娘子、臥しつつ、夫君の歌を聞き、枕より頭を挙げ、声に応へて和ふる歌一首。

ぬばたまの黒髪濡れて沫雪の降るにや来ますここだ恋ふれば

（左注略）

右の題詞と和歌の内容には適合しない点が多く、創作事情による不一致かともされているが、いまはそれにはふれない。このように、『万葉集』巻十六前半の多くの題詞は、冒頭の「昔～あり」という書き出しをはじめとして、後世の『伊勢物語』等に類似する点が多く、古橋信孝氏が『物語文学の誕生―万葉集からの文学史』（平成十二年・角川書店）で述べられたように、『伊勢物語』を生み出すに至った母胎が奈良時代からすでに存在していたことを十分に思わせもするが、また同時に、両者の内容には、なお大きなへだたりがあるようにも見うけられる。以下、その違いの一つとして、『万葉集』巻十六のこれらの作の題詞に、男が女をのぞき見る、いわゆる「かいまみ」の場面がまったく見られないことにあえて注目し、それを手がかりに、両者の世界の根本的な相違点と、その背後の事情を探ってみたい。

二

『伊勢物語』初段で主人公は、一人の女性ではなく複数の「女はらから」を見て懸想するが、丸山キヨ子氏『源氏物語と白氏文集』は、その趣向の背後に『遊仙窟』の影響を考えられ、さらに渡辺秀夫氏『平安朝文学と漢文

世界』（平成三年・勉誠社）は、その想定を章段全体の読解へと展開させておられる。渡辺氏が言われるように、初段が『遊仙窟』を部分的にではなく「主題的」に「引用」していることはもはや否定できないように思われるが、さらに、その『遊仙窟』には、次のような「かいまみ」の場面が設定されている。

冒頭部分、召使いの桂心から女主人十娘の人となりを聞いていた主人公の耳に「内裏に箏を調ぶるの声」（以下、訓読は成瀬哲生氏『中国古典小説選』4〈平成十七年・明治書院〉を参考にした）が聞こえ、主人公は十娘に詩を贈る。やがて届けられた返事の詩を読み終え、顔をあげた主人公の視界に、突然十娘の「半面」がちらりと見え、主人公は再び詩を贈ることになる。

余詩を読み訖へて頭を門中に挙ぐるに、忽として十娘の半面を見る。余即ち詠じて曰はく、（下略）

この『遊仙窟』の「かいまみ」と『伊勢物語』初段のそれとの間には、いくつかの大きな相違点もあるが、前述のような両者の全般的な関わりを考えれば、このふたつの「かいまみ」も、けっして無関係なものではないように思われる。

さらに、唐代伝奇小説のひとつ『歩飛烟』（作者皇甫枚は九世紀後半から十世紀初頭の人）では、次のように、武公業の愛妾・飛烟と隣家の息子・趙象が出会う冒頭の場面に「かいまみ」が用いられている。

（前略）其の子を象と曰ひ、端秀にして文有り。纔かに弱冠なり。（中略）忽ち一日、南垣の隙中において飛烟を窺ひ見て、神気倶に喪ひ、食を廃し寐を忘る。（下略）

この「かいまみ」は、予想外に見てしまったことが懸想のきっかけになるという点で、さきの『遊仙窟』のものよりも、いっそう『伊勢物語』初段に近い。それに加えて、ここには、主人公・趙象が当時「纔かに弱冠」であったと記されている。「弱冠」は二十歳の意だが、この語は『礼記』（曲礼）の「人生十年曰幼、学、二十曰弱、冠…」という記述を典拠とする。すなわちそれによれば、古く周の時代には、男子は二十歳で冠を加えて元服した。陳明姿氏が「密通物語における女性像」（菊田茂男編『源氏物語の世界』平成十三年・風間書房）の中でこの「弱冠」を「初冠」と訳しておられるように、「弱冠」の語の「冠」という文字には、元服の意味が込められている。だとすれば、「うひかふぶり」をした主人公が「かいまみ」をする『伊勢物語』初段と、この『歩飛烟』の冒頭の類似性は、さらに一層強まることになる。

三

『遊仙窟』の女主人公・十娘が、「神仙窟」に住む仙女になぞられていることは、その作品名から考えても自明の事実である。一方、成立時代の遅れる『歩飛烟』の方にも、女主人公・歩飛烟を「神仙」になぞらえる表現が散見する。『遊仙窟』は私娼窟や妓楼の女性との交渉を

述べたものともされ、『歩飛烟』は隣人の愛妾との密通をその内容とするが、一方でそれらが、俗世間の男性と仙界の仙女との接触を語る神仙譚の雰囲気を、さまざまな形で継承していることは重要である。

仙界の仙女は、俗世間の男性にとって、どこまでも異次元の、異界の存在である。通常はふれあうことができず、またふれあってはならない両者がふれあうところに、仙女譚の本質があるが、それは『歩飛烟』のような密通物語にも、ほぼ共通して指摘できることがらであった。簡単に言ってしまえば、これらの中で女性たちは、男性にとって他者なる存在として登場する。「かいまみ」は、そのような他者との禁じられた接触や困難な交流を可能にする、あるいは促進する装置として、『遊仙窟』や『歩飛烟』に用いられていると考えられる。そしてその事情は、初段をはじめ数多くの章段に「かいまみ」の場面を有する『伊勢物語』にも、ほぼ同じように指摘できるように思われる。

四

冒頭に見た『万葉集』巻十六前半の歌の題詞には、「かいまみ」の場面が一度も登場しない。極論を承知であえて言えば、そこには他者としての女性は登場していないと言ってよい。さきに題詞と歌の本文を掲げた三八〇四・三八〇五番の場合、妻の「娘子」は、主人公の「壮士」とその心情においてまったく一身同体である。言い換えれば、ここでは「娘子」は、「壮士」が期待するままの、その意味で理想的な女性として描かれている。これ以外の作品を見ても、巻十六前半に登場する女性たちの多くは、そのような、男性から見て理想的な、いわば儒教的にすぐれた女性として描き出されている。そのような女性たちに対して、男たちはもはやわざわざ「かいまみ」する必要を持たない。そして同時にそこには、他者と他者との接触から生み出される、真の意味でのドラマもまた、存在しないのである。

ちなみに、三八〇四・三八〇五番の題詞のうち、「公事（くじ）は限りあり、会ふ期（ご）は日なし」といった表現に『遊仙窟』の影響が見られることは、小島憲之氏『上代日本文学と中国文学・中』（昭和三十九年・塙書房）にすでに指摘があり、古橋氏は前掲書でそれが「場面の設定にかかわる」大きな影響関係であると述べておられる。仙女譚の流れを汲む『遊仙窟』をそこまで取り込みながら、『万葉集』巻十六前半の題詞の作者たちは、仙女のような女性、他者なる女性との恋愛を、それらの題詞の中に描こうとはしなかった。巻十六前半の中には、よく知られた「竹取の翁」の歌（三七九一～三八〇二）も含まれていて、そこには神仙との接触がおおらかに語られてはいるが、それらの中にあってもなお、両者の間の他者性はほとんど認識されていない。

五

『万葉集』三八〇四・三八〇五番の題詞では、新婚早々公務のために家を離れ、「累年の後に」ようやく帰宅した夫が、おそらくは寂しさと心労から「姿容の疲羸せる」妻の姿を見て、泣きながら歌を詠んでいた。一方、『伊勢物語』第二十四段では、「宮づかへにし」と言って出かけたまま三年間帰ってこない夫を待ちかねた妻は、「いとねむごろに言ひける」別の男性と結婚の約束を交わすが、その当日、夫が突然帰宅する。事情を知って立ち去る夫を追いかけた妻は、追いつけずに歌を詠んで死んでしまう。思いあっていながら互いの心をはかりかねた男女の悲劇が、一見単純な設定の中に巧妙に描き出されている章段だが、その根本に、この二人が、すなわち男と女が互いに、完全には一体化しえない他者であるという前提が据えられていることは、さきの『万葉集』の場合と比べれば明らかである。ここには「かいまみ」は登場しないが、帰宅した夫に対して妻が戸を開けず、ものごしに歌を詠みあう場面が、他者同士の微妙な心の探りあいという意味で、それにあたると言ってもよい。

定家本等でこの段のすぐ前に置かれている第二十三段は、「井のもと」でともに遊んだ幼なじみの夫婦の話であって、一見他者性などとは無縁に見えるが、よく知られた「河内越え」の場面では、男は、河内の女の所に通う自分を「悪しと思へるけしきもなく」送り出す妻に他の男性がいるのではないかと疑い、「前栽の中に隠れゐて」妻の様子をうかがう。ここでもまた「かいまみ」は、妻を他者として認識してしまった男の、他者に対する行為として設定されているのである。

第二十四段や第二十三段の女性たちには、もはやすでに仙女の面影そのものは感じられない。だが、『遊仙窟』とこれらの章段の間に、『伊勢物語』との関係が確実視されている元稹の『鶯鶯伝』や前述の『歩飛烟』のような、仙女譚のさらなる世俗化ともいうべき作品を置いてみると、両者はともに、男性と他者なる女性との物語として、かならずしも無関係なものとは考えられなくなる。文学作品における「恋愛」は、このような男女のドラマとして、はじめて成立する。諸田龍美氏は「中唐における『恋愛』の成立と展開―白居易を中心として―」（『愛媛大学法文学部論集・人文科学編』21・平成十八年九月）の中で、儒教倫理による抑制が弱まり『好色の風流』が流行した中唐の状況を詳述しておられるが、日本における白居易受容の隆盛ぶりを考えれば、海を越えて伝わった時代状況をひとつの背景として、『伊勢物語』のような作品が生み出されていったことも、むしろ当然のこととして了解されるのである。

（国文学者・関西大学教授）